

知的障がいのある子どもを親元から離す際の母親の心理的プロセス

—緊急に入所施設利用に至った2事例から—

臨床心理学コース 山田 哲子

The process of living apart from their adult offspring with mental retardation for ageing mothers
—With focus on unexpectedly utilization of residential placements—

Tetsuko YAMADA

The purpose of this paper is to find explanations to the research questions: "what are the experiences of the elderly mothers before making children be residential institutes unexpectedly and after?" 2 mothers of children with mental retardation have participated. The process of making children be out-of-home consists of 3 stages: <1.the emergency phase>, <2.the complicated phase of residential placement utilization>, <3.the stable phase>. The promotional thought for the mothers to use of their children- living away from home is giving up for taking care of children any more. After starting utilization of residential placement, the mothers felt guilty strongly. To feel trust toward stuffs of residential institutes is important for mothers and related to positive evaluations toward the residential institutes. To support these mothers, information provision and attentive hearing is needed.

目 次

- 1 章 問題と目的
- 2 章 方法
 - A. 手続き
 - B. 分析方法
 - C. 事例の概要
- 3 章 結果
 - A. 心理的プロセスの各時期
 - B. 緊急に子どもの入所施設利用を余儀なく決定した親の心理的プロセスのTEM図
 - 1. <1. 緊急期>
 - 2. <2. 葛藤期>
 - 3. <3. 安定期>
 - C. A, Bの子どもの将来の生活場所についての考えの変遷
- 4 章 考察
 - A. 【子どもを親元から離す】前の「短期SSを利用する／しない」の選択
 - B. 【面会に行く／行かない】と繋がる【施設職員を信頼する／不信感を抱く】、【母親もが施設生活に慣れる／慣れない】
- 5 章 総合考察
 - A. 緊急に子どもを親元から離した家族と、長期に渡り準備をして子どもを親元から離した家族の心

理的プロセスの相違点

- 1. <子どもを親元から離すまで>
- 2. <子どもを親元から離してから>
- 3. <親が安定してから>
- B. 老年期の障がい者家族支援の臨床心理学的示唆
- 6 章 本研究の限界と今後の展望
- 謝辞
- 引用文献

1 章 問題と目的

知的障がいのある子どもの居る家族は、学童期・青年期と様々な発達課題と向き合い、老年期には親の高齢化や親亡き後の問題が差し迫る。よって、「成人した子どもの生活場所の選択」に関する支援が老年期の障がい者家族支援にとって重要なテーマとなる。海外では“成人した知的障がい者の大多数が親と住んでいる”という状況が問題視され、施設移行の研究が行われるようになった。施設利用前後の家族を比較検討した研究によると、施設利用後に家族の介護負担が低下することや家族のQOLが向上することなど、施設利用によって家族に良い変化が起こることが報告されている¹⁾。しかし同時に、家族は知的障がいのある子どものケアを担えなくなる限界まで入所施設を探さない

傾向にあることが明らかになった²⁾。また、親が子どもを親元から離す誘因には①行動障害・機能的問題などの子どもの問題、②親による対処やケアの困難さ、③在宅を維持するに相応しいサービスの不足の3つが指摘されている³⁾。そしてこのような契機によって緊急に行われるよりも、知的障がいのある子どもが親と住む状況から親の居ない環境に移行するのはもっと計画的に行われることが望ましいという⁴⁾。

我が国の知的障がい児・者の総数は54.7万人とされている。在宅者は41.9万人にのぼり、そのうち18歳以上は28.9万人と言われ69.2%に該当する⁵⁾。そして在宅をしている知的障がい者の将来の生活場所の希望は「親と暮らしたい」「きょうだいと暮らしたい」が38.5%で最も高いということが明らかになった。これらの現状や、専門家からの子どもを施設に預ける提案を拒絶する家族の存在が指摘されていること⁶⁾は、一概に知的障がいのある子どもと親が別々に暮らす為に施設利用をすることが良いことだと前提せずに、家族の視点から「親子が生活を共にすること／別々に暮らすこと」を理解する必要性があることを示している。

父親・母親の両者に焦点を当て「入所施設を利用している成人知的障がい者の両親が、利用を検討してから継続利用している現在に至るまでどのような心理的プロセスを体験したのか」を明らかにすることを目的とした研究⁷⁾によると、両親の心理的プロセスは<1. 子どものために親が準備する：施設利用準備時期>、<2. 親子が離れる：施設利用開始時期>、<3. 別々の生活に慣れる：安定期>の3つの段階に分かれた。そして<2. 施設利用開始時期>に両親は様々な不安や葛藤を抱くこと、そしてその不安や葛藤は施設生活をしている子どもの様子を知ることなどから軽減されること、施設生活を通してそれまで親が抱いていた「自宅で生活する子ども像」から「新たな子ども像」が再構築され、親が子どもや施設を信頼することによって<3. 安定期>に移行することが明らかになった。しかしこの研究は、「両親が健在なうちに施設利用を決定した」というサンプリングの傾向から計画的な施設利用をした事例と考えられ、先行研究で指摘さ

れていたような緊急に施設利用をした家族とは異なる心理的プロセスを歩んでいる可能性がある。さらに計画的に利用に至った両親でさえ、いざ利用すると罪悪感や不安が高まっていたことから、緊急に施設を利用せざるを得なかった家族はさらに強い心理的困難を抱くのではないかと示唆されている。

そこで本研究では、先行研究で指摘されているような入所施設の利用を余儀なくされた状況に至った親に焦点を当て、子どもを親元から離して現在に至るまでにどのような心理的プロセスを経験しているのかを明らかにすることを目的とした。尚、本研究の「施設」という言葉は入所更生施設、グループホーム（以下GH）、ケアホーム（以下CH）、ショートステイ（以下SS）を指し、施設の種類ごとに分けずに「子どもと一緒に生活していた状況から別々の生活になる」という体験に焦点を当て、この体験を親の立場から見て「子どもを親元から離す」と称することにした。

2章 方法

A. 手続き

X県にあるY入所施設を利用している母親にインタビュー調査を行った。サンプリングの方法は、Y入所施設長に緊急に利用に至ったと思われる保護者の紹介を願い、協力の得られた母親二名である。調査協力者の概要を表1に示す。尚、Y入所施設は18歳以上の知的障がい者を対象に生活介護及び施設入所支援事業を行っており、利用者が100名を超える郊外の知的障害者更生施設である。

データ収集の方法は面接法を採用した。面接実施前に研究目的の説明、面接における協力者の権利について（インタビューの中止や回答拒否の権利など）、面接を録音する許可、プライバシーの保護などを説明し、面接承諾書に署名を頂いた。尚、面接の構造は半構造化面接であり、質問項目は①施設利用したきっかけ、②施設利用をするまでの流れ、③施設を利用して起きた家族や本人の変化、についてインタビューの流れに応じて質問した。その他、基本情報として家族構

表1. インフォーマントの概要

Info.	居住形態	家族	子ども（年齢）／障がいの種類・程度	施設利用
A（70代） 無職	独居	元夫、長女、 次女	次女（40代）／知的障がい 重度	20年間 Z 施設→Y 施設に 5 年
B（50代） 対人援助職	三女と 2人暮らし	元夫、長女、 次女、三女	長女（30代）／知的障がい・自閉傾向 重度	Y 施設に10年弱

成及び同居している家族の確認、本人の障がい名及び程度、入所施設の利用年数を確認した。調査時期は2011年7月、所要時間は130～150分であり、面接は二事例とも筆者が行った。

B. 分析方法

データ分析の方法は、複線経路・等至性モデル（以下TEM）を用いた⁸⁾。TEMは個人の経験の多様性を記述するのに適した手法であり、非可逆の時間における「等至性」と「複線経路」という概念を特徴とした新しい質的研究である。等至性（Equipfinality）とは、人が経験を重ね、異なる経路を辿りながらも類似した結果に辿りつくということを示す概念である。その等至性を実現する点を等至点（Equipfinality Point=EFP）と呼び、これは研究上の焦点化がなされるポイントである。その為、研究者が設定することになる。本研究では「子どもを親元から離す」選択を等至点とみなすことによって、その選択の前後にある母親たちの心の動き及び体験を捉えることにした。複線経路とは、一つの等至点までの経路の多様性を表す概念である。必須通過点（Obligatory Passage Point=OPP）という概念は、多くの人が経験すると思われるポイントである。個々人の経験の多様性を描き出すTEMにおいて、必須通過点は個人の多様性を制約する契機を見つけやすくする働きがある。分岐点（Bifurcation Point）とは、ある経験において実現可能な複数の経路が用意されている状態であり、複線経路を可能にする結節点のことを分岐点と呼ぶ。以上に述べた等至点（EFP）、必須通過点（OPP）、分岐点（BFP）などの概念を用いて、個々人の経験の流れ及び個人の中に存在する可能性としての複数体験の流れを比較分析することを可能にするのがTEMである。このTEMの特徴は、本研究の子どもを親元から離す経験をした母親二名の心理的プロセスを明らかにする狙いに有効であると考え、採用した。

C. 事例の概要

事例A：一人親家庭にて、母親Aの手術と入院の為、急遽施設利用を余儀なくされた事例

次女はてんかんと知的障がいの診断があり、現在も投薬治療が続いている。母親であるAが初めて「子どもを親元から離す」という選択肢を知ったのは、次女が養護学校高等部の卒業時に学校側から今後の生活に関して説明された時である。養護学校卒業後、Aは次女を自宅から通所施設に通わせる選択をし、その数年後、急遽Aが手術及び入院をしなければいけなくな

る。Aは役所や長女から入所施設利用を勧められ、仲間も同じ施設を同時期に利用することや、何よりもAがケアを担えないことなどから次女が20代の時にZ入所施設利用を決意した。20年近く利用していたが、AはZ施設から他の施設へ変更したいという思いがあったという。その後次女がZ施設内で利用者間トラブルに巻き込まれたことをきっかけに、Aは施設変更を決意する。そして偶然空きがあったY入所施設を役所から紹介され、移行する。現在Aは独居、次女はY入所施設を利用して数年を経た。尚、これまで母子が会う機会としては毎月の面会以外に正月と盆に次女を自宅に帰省させていたが、今年からAの体調不良のため帰省を取り止めることにした。

事例B：家庭内の問題の激化による母親Bの体調不良の為、想定外の施設利用をした事例

人見知りや後追いの無かった長女は、医師から知的障がいと自閉症の診断を受ける。母親のBは長女が学童期の間に、必要に迫られて短期のSSを利用することは比較的頻繁にあった。家庭内の問題によりBが体調不良となり、同時に長女も不安定になる。友人や主治医の勧めもあって自身の休養を主な目的として、Bは20代の長女を数カ月のSSに預けた。その後、役所はBにY入所施設を紹介する。長女を入所施設に預ける提案について夫は反対したが、Bは自身がケアを担える状況でないことを説明し、長女とY入所施設に見学に行って利用を決意した。Y入所施設利用を始めて数年間は家庭内の問題も落ちつかなかったが、現在は家庭の問題が落ち着き、長女はY入所施設を継続して利用している。

3章 結果

A. 心理的プロセスの各時期

緊急に入所施設利用に至った親の心理的プロセスを、【親が在宅ケアを担えない状況になる】から【子どもを親元から離す】までの＜1. 緊急期＞、【子どもを親元から離す】から【子どもが安定したと思う】までの＜2. 葛藤期＞、【子どもが安定したと思う】からの＜3. 安定期＞に分けた。尚、各時期の経過時間は、＜1. 緊急期＞ではAが1ヶ月、Bが2・3カ月であり、子どもを親元から離す選択を迫られた緊急性が示されていると言える。＜2. 葛藤期＞から＜3. 安定期＞に入るまでは、両名とも2・3年を費やしたと語られた。

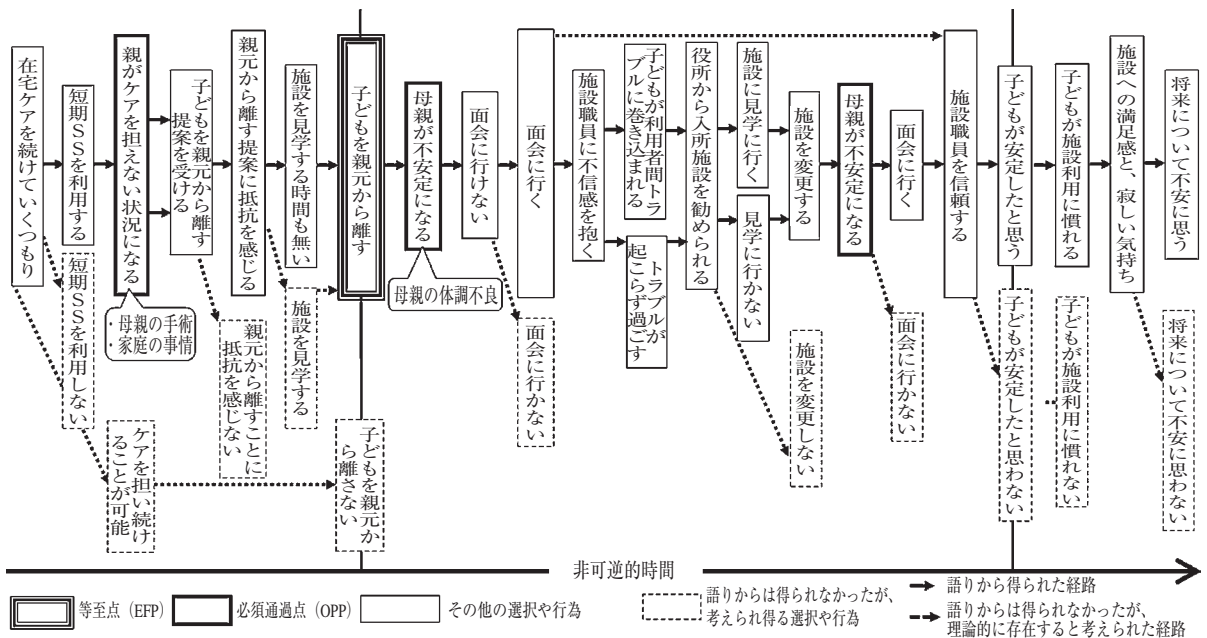


図1 AとBの体験と心理的プロセスのTEM図

B. 緊急に子どもの入所施設利用を余儀なく決定した親の心理的プロセスのTEM図

【子どもを親元から離す】ことを等至点 (EFP) として焦点を当て、等至点に向かい、そこから分岐した両名の経験をTEMを用いた図によって可視化した (図1)。「親がケアを担えない状況になる」ことは両名ともが経験したことである為、必須通過点 (OPP) として定めた。また、施設利用を始めて家族の不安が高まるという先行研究の指摘⁴⁾と一致する【母親が不安定になる】も必須通過点 (OPP) として定めた。この【母親が不安定になる】は【子どもを親元から離す】時だけでなく、【施設を変更する】後に再度経験されていた。以下、各時期のTEM図を元に詳細を述べる。

1. <1. 緊急期>

<1. 緊急期>の詳細を図2にて示す。A・B両名とも在宅ケアを続けていくつもりであった状態の中、身内の葬儀など必要に迫られて数日間子どもを預ける[短期SSを利用]していた。その後、家族の中で子どものケアを担ってきた母親の手術や家庭内の問題による母親の体調不良などの【親がケアを担えない状況になる】と、この緊急事態に役所や周囲から【子どもを親元から離す提案を受ける】に至っていた。この提案については両名とも「受け入れがたいと思った」、「嫌だと思った」と【親元から離すことに抵抗を感じ】

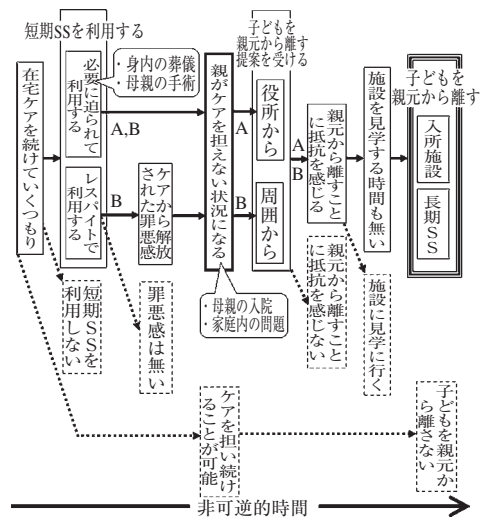


図2 <1. 緊急期>のTEM図

ており、想定外の提案が母親の感情に与えた影響の大きさを示している。緊急に手術に迫っていたA及び体調不良のBは【施設に見学に行く時間なく】、AはZ入所施設、Bは数カ月の長期的SSを利用して【子どもを親元から離す】経験に至っている。A・Bともにケアが担えない状況になったことで【子どもを親元から離す】という経路が生じた為、【ケアを担い続ける

ことが可能】であった場合に存在したであろう経路として【子どもを親元から離さない】という両極化した等至点を図示した。

2. <2. 葛藤期>

<2. 葛藤期>の詳細なTEM図を示す(図3)。子どもを親元から離すと、A・B両名ともに【母親が不安定になる】経験をしていた。それまで子ども中心であった生活から、子どものケアが無くなるという環境の変化が起こり母親の自由な時間が増えるも[ケアから解放された罪悪感・空虚感]が母親を襲っていた。A・B共に施設利用直後3ヶ月ほど面会に行くことが出来ず、急遽親がケアを担えない状況になるという事態の影響が【面会に行けない】という形で表れていた。その後退院したAはZ入所施設に【面会に行き】、職員の子どもに対する態度や関わりを見ながら【子どもが辛そうにしている様子】から【施設職員に不信感を抱いていた】。長期SSを利用してBは【面会に行き】、子どもが落ち着いて施設で過ごしている様子を目の当たりにすることでさらに罪悪感が募ったという。その後のAは20年近く【施設変更を願いつつも利用せざるを得ない】状況だった。そして【子どもが利用者間トラブルに遭い】、Z入所施設にはもう置いて

おけないと感じたAは、役所に施設変更の願いを届けた。長期SS利用中に新しく【入所施設を勧められた】Bは、抵抗を感じながらも「見なければ何も始まらない」と子どもとY入所施設に見学に行っている。その際に【施設職員に不安を話】し、施設変更に至っている。

Aは長期間利用したZ入所施設から現在のY入所施設へと、Bは半年近く利用した長期SSからY入所施設へと【施設を変更する】経験をしているが、両名とも施設変更時に再び【母親が不安定になる】体験が語られた。特に利用者間トラブルに巻き込まれたAは、新しい施設でもまた利用者間トラブルがあるのではないかという不安が一番強かったという。利用前に見学を行い、「子どもが施設を気に入った様子から子どもの意思を感じた」と施設利用を決めていたBも、施設利用の罪悪感は存在していた。A・B両名ともY施設に面会に行き、[子どもを任せられると感じる]、[子どもは施設で守られている]と思うなど【施設職員を信頼感する】ようになる。そして【子どもが安定したと思う】体験をしていた。このように、面会に行った際に施設の様子を母親の目で見て、【子どもが辛そうにしている／ニコニコしている】、【施設職員を信頼す

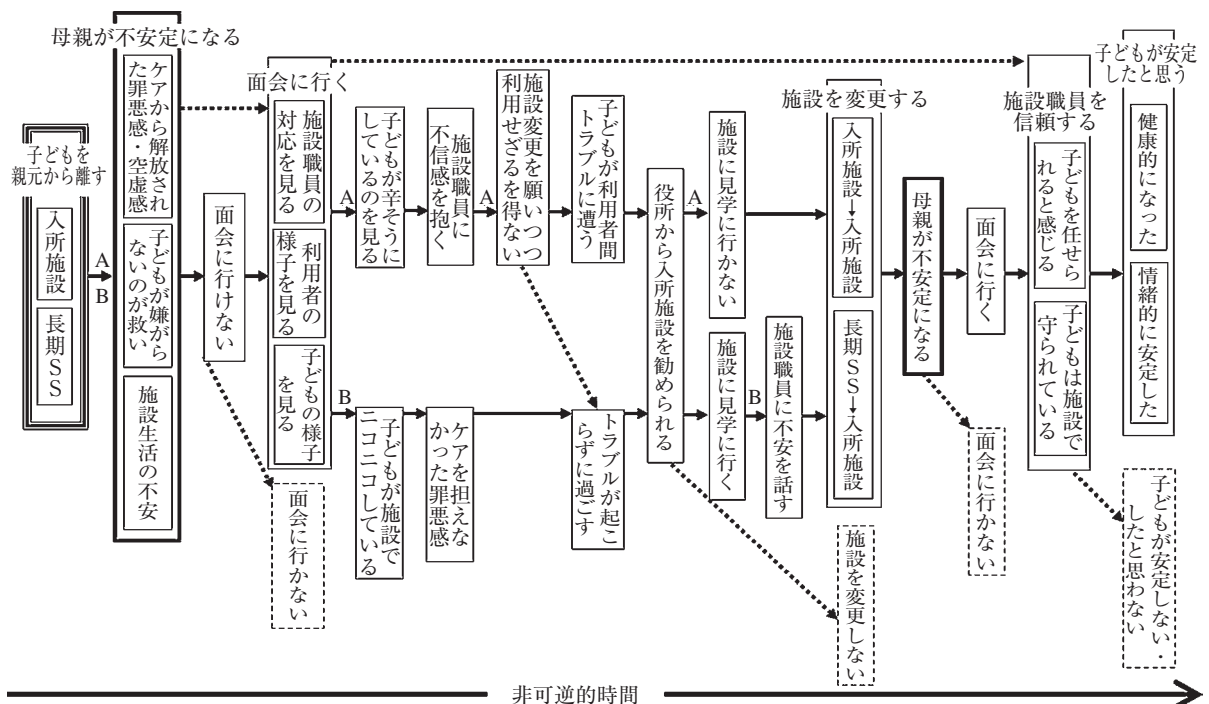


図3 <2. 葛藤期>のTEM図

る／不信感を抱く】は親にとって重要な分岐点（B FP）であると言える。

3. <3. 安定期>

<3. 安定期>の詳しいTEM図を図4にて示す。

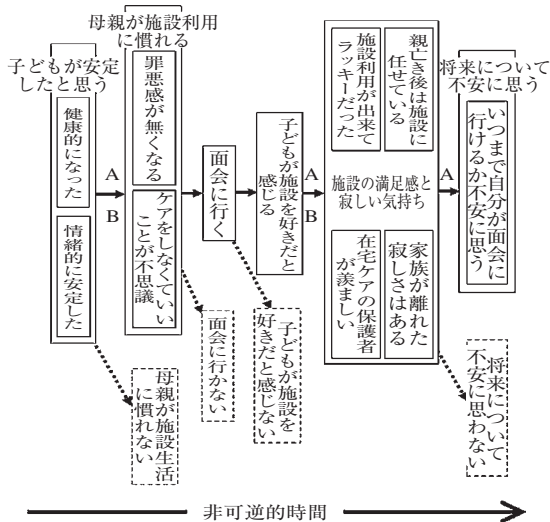


図4 <3. 安定期>のTEM図

子どもが施設生活で安定したことを肯定的に捉えられるようになると、【母親が施設利用に慣れる】体験に繋がっていた。A・B両名が施設生活に慣れてからは、利用を始めてすぐに見られたような子どもに対する罪悪感はないと語った。そして【子どもが施設を好きだと感じる】体験から、「施設が親代わり」という言葉のように施設に対する満足感が語られたが同時に「家族と離れている寂しさ」は依然あると語られた。この【施設の満足感と寂しい気持ち】は葛藤となる感情ではなく、施設利用を続けることに迷いは語られなかった。そして体調不良が続くAは、「いつまで自分が面会に行けるか不安に思う」といった【将来について不安に思う】体験をしていた。

C. A, Bの子どもの将来の生活場所についての考えの変遷

図5と6にて、事例A・Bにおける子どもの将来の生活場所に関する考えの変遷を表す。事例Aは、「いつか自分が子どもを見られなくなったら子どもを親元から離すだろう」と在宅ケアを続けていくつもりで母親であった。しかしながら自らの手術をきっかけに、

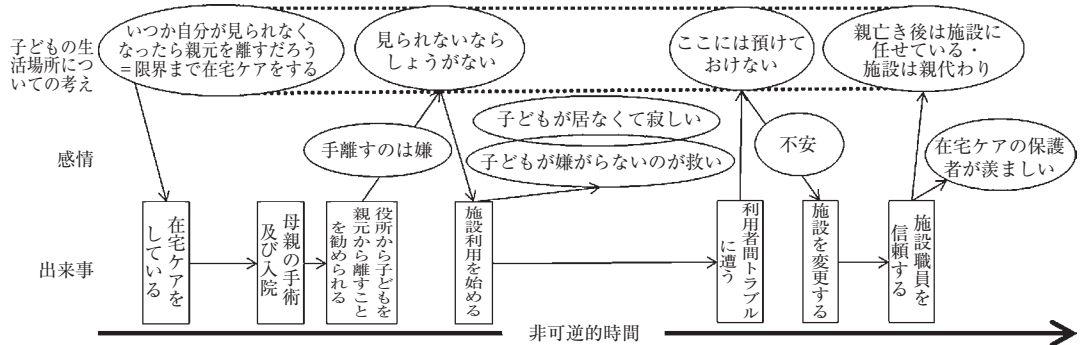


図5 Aさんの出来事の流れと「子どもの生活場所についての考え」の変遷

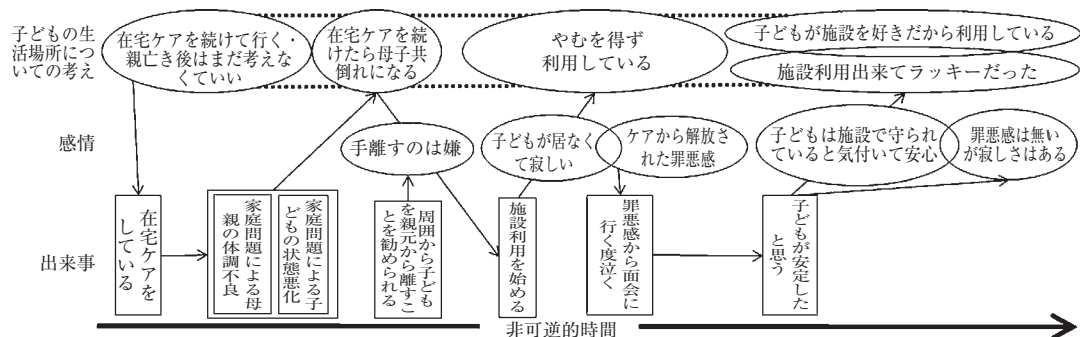


図6 Bさんの出来事の流れと「子どもの生活場所についての考え」の変遷

手放すのは嫌という感情を抱きながらも「見られないなら（施設利用も）しょうがない」という考えに変化する。そしてこの考えはZ入所施設利用に至り、長期間抱かれていた。子どもの利用者間トラブルを契機に「ここ（Z施設）には預けておけない」と変化し、施設変更に関わっている。やがてY入所施設に満足し、施設職員に信頼感を抱けるようになると子どもの生活場所についてAは「親亡き後はY施設に任せている・Y施設は親代わり」と考えていた。しかし同時に感情面では「在宅ケアの保護者が羨ましい」と在宅ケアを続けたい気持ちも存在している。

事例A同様、Bも「在宅ケアを続けていく・親亡き後について考えなくてもいい」と考えていた状況で、家庭の問題によりB自身と子どもの状態が悪化する。その出来事がきっかけで「このまま在宅ケアを続けていたら母子が共倒れになる」という考えに変化した。抵抗感を抱きながらも仕方が無く子どもを親元から離れた為、当時のBにとって「止むを得ず利用している」期間であった。その後、子どもが施設生活で安定したと思うようになると、「子どもが施設を好きだから利用している」と変革が起き、最終的には「施設利用が出来てラッキーだった」と感じている。

このようにTEM図を描いたことで、非可逆時間の中で生じた出来事と母親が抱く「子どもの生活場所についての考え」が変遷していく様子を明らかにすることが出来た。

4章 考察

TEMによる分析の結果、実際に母親が選ばざるを得なかった経験及び意思をもって選択した経験、そして理論的には存在すると予想されるが選択しなかった経験が可視化された。この点について考察を行う。

A. 【子どもを親元から離す】前の「短期SSを利用する／しない」の選択

SSは主に、家族が知的障がいのある子どものケアを行うことが出来ない際の緊急の受け入れ先としてや、レスパイト目的で使用されるサービスである。レスパイトサービスとは、障害児（者）を持つ親・家族を、介護から一時的に解放することを目的にした援助のことである⁹⁾。本研究の母親は必要に迫られてSS利用をした際に罪悪感を抱いたという語りは無かったが、Bはレスパイト目的での利用には罪悪感を抱いたと語った。その理由として、Bは「子どもの障がいに

は母親としての自分の責任があるのかもしれない」という母親特有の思いが「自分はケアを担わなければならない」という思いに繋がっていると述べた。家族とレスパイトサービスに関する研究では、母親が「心から子どものケアから解放される」ことの難しさを示していると言える^{10) 11)}。レスパイトサービスの充実には受け皿としての事業の拡大と共に、親の罪悪感を軽減させるような心理教育など、利用する／しないの壁を超えやすくする支援が必要とされている。

本研究のインフォーマントは、止むを得ず子どもを短期SSに預けた体験を「子どもを親元から離れた」経験とは認識していなかった。しかしながらBはこの体験を振り返り、「数日間のSS利用をしていなければ、後に利用することになった長期のSSは難しかったかもしれない。短期のSSは子離れの練習になっていたかも」と語った。このことから短期SS利用の意味は、当時は緊急対応としての利用というもののみであったが、子どもを親元から離れた後になって振り返ると、子離れ親離れのプロセスを辿る上で意味のある重要な体験であった、或いはそのような意味が後々付与される可能性があることが伺えた。レスパイトや緊急対応のサービスとして広く知られている短期SSに「親子が別々に暮らすかもしれない将来に備える踏み台」としての役割があるという発見は、SSサービスの充実を考えるにあたり重要な点になるだろう。また、SSに対しても抱かれた子どものケアに対する義務感とも感じられる親の思いは、「在宅ケアをするか、子どもを親元から離すか」という子どもの生活場所を選択するに迫り強く影響していることも考えられた。この点と関連する家族支援については第5章にて述べる。

B. 【面会に行く／行かない】と繋がる【施設職員を信頼する／不信感を抱く】、【母親もが施設生活に慣れる／慣れない】

子どもを親元から離すことを目標にしていた親は、施設を利用する前に親子にとって最善な施設を検討する為に講演会に行ったり見学に行ったりと能動的に施設と接触していたのに対し⁷⁾、緊急に施設利用をする必要性に駆られた家族は利用に先駆けてそのような時間も無く利用に至る傾向になりやすい。利用前に施設が本当に合う施設か否かを調べる事が不可能であった場合、家族にとって利用後の面会がその評価をする機会となる事が考えられる。母親二名は面会に行った際、施設内での子どもの様子や施設職員の子どもの

対する関わり、他の利用者の様子などを見ていた。そしてそれらが【施設職員を信頼する／不信感を抱く】の分岐点に影響していた。AはZ施設面会時、子どもが母親Aのそばに居たがっていたにも関わらず「保護者会があるから」と子どもをAから引き離すという職員の関わりから不信感を抱いたという。不信感を抱きながら利用を続け、最終的に利用者間トラブルにより子どもが一方的に怪我を負わされた経験からAは、「Z施設のことは思い出したくない、Z施設利用中は子どもを任せられると思わなかった」という現在にまで残る思いに至っていた。現在の日本では施設不足によりAのように不信感を抱いたまま利用せざるを得ない家族がいることが示唆されると同時に、【職員に信頼感を抱く／不信感を抱く】体験は【母親が施設生活に慣れる／慣れない】に繋がる重要性が明らかになった。

このように面会に行くことの重要性が示される中で、本研究の母親二名のように体調不良という問題が起ると面会に行けなくなる事態も想定される。Aは面会に行けない間、自身の手術よりも子どもを手放したことがつらかったことを語り、施設で子どもがどうしているかが気になっていたという。Bも面会に行けないほど自身の調子が悪かったことから、「最悪だった」と当時を振り返っていた。このことから、面会に行きたくても行けない親に対する支援も望まれる。

5章 総合考察

A. 緊急に子どもを親元から離れた家族と、長期に渡り準備をして子どもを親元から離れた家族の心理的プロセスの相違点

「知的障がいのある子どもを、親と共に暮らしている生活から施設での生活に移行することを決定する」という背景には、親子別々の生活を目標にしていた家族が計画的に行う場合と、在宅ケアを続けていく選択の中で急遽その続行が望めなくなっていく場合の二通りが存在する。このように出発点の異なる家族が、同じ「子どもを親元から離す体験」に至り、現在までのプロセスがどのように異なるのか、山田(2010)で得られた結果と比較をする⁷⁾。共通の体験の枠組みとして、＜子どもを親元から離すまで＞と＜子どもを親元から離してから＞、そして＜親が安定してから＞の3つの区分ごとに検討する。

1. ＜子どもを親元から離すまで＞

子どもを親元から離すことを目標にしてきた家族が入所施設利用に至る促進要因には「子どもの施設生活のポジティブなイメージ」が影響していた⁷⁾。つまり家族が、子どもが親元を離れることを肯定的に捉えたり、理想の子どもの将来の生活像として考えたりすることが施設利用に踏み切る背景の1つであることが示されたのである。しかし本研究のように在宅ケアの継続を望んでいた家族が緊急に施設利用をせざるを得ない状況に陥ると、その背景には、「自分がケアを担えないならばしょうがない」という諦めの気持ちが大きく働いていることが明らかになった。

2. ＜子どもを親元から離してから＞

施設利用を始めることで親子が別々の生活になると、親が精神的にクライシスを迎えることは先行研究で指摘されてきたが⁴⁾、施設利用を計画的に行った両親が施設生活の具体的な心配や子どもの身辺自立などに不安を感じていたことと異なり、本研究の母親二名は主に「子どものケアを担えない罪悪感」を強く抱いていた。Bは子どもを親元から離れた当初、面会の帰りに車の中で頻繁に聴いていた曲を、当時の辛い感情を思い出してしまうため現在も聞きたくないと語っていた。これは親にとっても予期せぬ施設利用の事実や、子どもの施設利用に対して「仕方が無い」と親先導で決定せざるを得ないこと、そして親子の生活場所が別々になるという環境の変化などが心理的負担に影響するのではないかとと思われる。

3. ＜親が安定してから＞

子どもを親元から離すことを視野に入れて施設利用をした家族は、施設利用生活が安定すると子どもを親元から離れたことの満足感を抱いていたが、本研究のAは「いつかはね、見られなくなるまで、とは思っていましたがね、こんな早くね…」と在宅ケアへの思いと、自身の手術が無ければ今も在宅ケアを続けていただろう展望、在宅ケアを継続している仲間親子を見るたびに羨ましいと思うことを語った。Bも「家族が離れ離れになって寂しい気持ちはあります」と語っている。これらは、出来る限り子どものケアを担っていたかった親だからこそ抱く感情だと思われる。

尚、Y入所施設を利用して安定期に入ったAも、「Y入所施設は自宅から遠いので、いつまで自分が面会に行けるか」という将来の不安を抱いていた。この結果は、施設利用生活が安定期に入った後も、両親は親亡き後や今後について不安を抱くという先行研究の結果と一致する⁷⁾。

B. 老年期の障がい者家族支援の臨床心理学的示唆

子どもが成人した後も、在宅ケアを希望している家族及び急遽在宅ケアを断念することになった家族に対する支援として以下のことが挙げられる。

子どもを親元から離す提案を受けた際に親が抵抗を感じた理由として、Aは「まだ子どもと一緒に居なかったから」と語り、Bは「施設は悲しい場所という施設観が自分の中にあったため」と語った。Bはその後Y施設に見学に行き、実際に利用し、自分の目で施設の良さを見たり周囲から施設は良い所だと保証されたりする経験を経て施設観の変遷があったという。このように、親ならば誰もが抱くであろう“子どもと一緒に居たい”という理由以外に、既に家族が持っている入所施設の悪いイメージや“親が子どもを施設に預ける”ということのネガティブな意味づけが「子どもを親元から離す」ことに抵抗を生みやすくしていると考えられる。そしてこれらが子どもを親元から離れた直後に母親が罪悪感に襲われて不安定になることにも関連しているのだろう。その為、在宅ケアを希望している家族に対して前もって「子どもを親元から離すことも在宅ケアを続けることも優劣を付けることは出来ない」というように子どもを施設に預けることは悪いことではないという心理教育の必要性や、実際に入所施設を見学する機会などを学童期や養護学校在籍時に持つことなどが考えられる。また、SSをより身近なものに感じられるようなサポートを充実させることで、家族に在宅ケアの生活をしながらSSの利用を促進し、緊急事態の備えになるだろう。

そして急遽、施設利用に至った家族へのサポートとして、利用前に施設スタッフと家族がやり取りし、家族が抱えている施設利用に関する不安について話せる機会を設けることが挙げられる。長年に渡って入所施設利用に向けて準備をしてきた親と異なり、在宅ケアを続けていくつもりであった本研究の母親二名は、入所施設に関する情報を集めておらず、同様の家族は入所施設に関する情報不足の傾向は強いと推測される。さらに、利用前に実際にその入所施設を利用している保護者とやりとりが出来る機会があれば、より家族の不安を取り除くことが出来る安心材料となる。具体的には、施設の面会日など他の保護者が来訪する機会に見学を行うなどが挙げられるだろう。利用直後の家族は不安定になりやすく、その心理面のケアも必須である。改めて入所施設利用は悪いことではないという心理教育や、面会に来られない親に対しては電話などのツールを用いて可能な範囲での施設職員とのやりと

り、施設内での子どもの様子を知ることが出来る機会を持つことが家族の安定を促進させられる。Bの「(Y施設を緊急に利用したが)結果論から言うと、とても良い施設にお世話になったので良かったんですけど、良くない施設にお世話になることになったっていう結果だったら後悔したでしょうね。もっと罪悪感もすごかった」という語りからは、母親の施設に対する評価が「緊急に施設利用を決めた自分」に向けられる危険性があることを示している。

さらに本研究の母親二名が、現在の施設に対する満足感や信頼感と同時に在宅ケアを継続したかった思いや家族が離れ離れになった寂しさなどの感情を持っていたという点から、在宅ケアを希望しながらもそれが叶わなかった家族に対して感情の傾聴など、継続的な心理的ケアが必要とされていることが示唆される。

6章 本研究の限界と今後の展望

本研究では在宅ケアを続けて行くつもりであった親が、何らかの理由により緊急に入所施設利用をせざるを得ない状況になってからの心理的プロセスを事例研究的にアプローチした。しかし実現可能性を重視したサンプリングであった為、一般化に限界がある。具体的にはY入所施設を利用している母親二名という限定が入所施設に対する感情や思いの結果に大きく影響している可能性がある。A・Bの両方が、離婚または実質的な婚姻生活が無くなる体験をしていた。しかし、子どものケアを担う人物が母親一人になる変化だけでは「子どもを入所施設に預ける」という選択肢は考えていなかった。つまり、知的障がいのある子どもの母親は家庭での子どものケアティーカーが自分一人になっても子どものケアを担っていきたいという思いが強い傾向があると示唆される。この点について、施設を利用せざるを得ない緊急性がどのようなものなのかを視野に入れながら、今後は父親一人家庭のケースなど広く焦点を当てることで、計画的ではない施設利用に至った親に対するサポートの知見が広がるであろう。

また、本研究では分析の対象としなかったが、インタビューの内容だけでなくインフォーマントの話し方や様子などにも焦点を当てて分析を行うことで、インフォーマントの語りからより豊かな知見を得られると思われる。本研究の事例Aは、「…(Z施設利用当時は)胸がつまるようなね、そんな思いでしたよね…。今はもうね、Y入所施設に行って本当に良かったと思っています」というように、「Z施設のことを思い

出した後には必ず、現在利用している Y 施設への満足感を語る”といった苦い感情を打ち消すかのような話し方のパターンが見られた。同様に、Z 入所施設や在宅ケアをしている保護者仲間について語る際には言い淀んだり涙目になったりする場面が見られ、一方 Y 入所施設や面会時の母子の過ごし方などについては流れるように語るなど、語り方に話者の感情・心理面が表されていたように感じられた。これらの視点を活かすことで、今後も障がい者家族支援を発展させるにあたり家族の生の声を活かしていく際の重要な点になると思われる。

(指導教員 中釜洋子教授)

謝辞

本研究に協力して下さった Y 施設長、そしてご自身の体験をお話し下さった 2 名のお母様方に心より御礼申し上げます。論文執筆にあたり、御指導を下さった中釜洋子教授に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) Selzer, M. M., Krauss, M. W. & Tsunematsu, N. (1993). Adults with Down Syndrome and their aging mothers: diagnostic group differences. *American Journal on Mental Retardation*, 97, 496-508
- 2) Werner, S. Edwards, M. and Baum T. N. (2009). Family Quality of Life Before and After Out-of Home Placement of Family Member With an Intellectual Disability. *Journal of Policy and Practice in Intellectual Disability*, 6, 1, 32-39
- 3) Rimmerman, A. (1995). Readiness for community residence: the AKIM-Jerusalem demonstration project. *International Journal of rehabilitation Research*, 18, 86-90
- 4) Selzer, M. M., Krauss, M. W., Hong, J. & Orsmond, G. I. (2001). Continuity or Discontinuity of Family Involvement Following Residential Transitions of Adults Who Have Mental Retardation. *MENTAL RETARDATION*, 39, 3, 181-194
- 5) 内閣府 編著 (2011). 障害者白書 平成23年度版. 佐伯印刷, p 12-14
- 6) Smith, G. C. Tobin, S. S., & Fullmer, E. M. (1995). Elderly mothers caring at home for offspring with mental retardation: A model of permanency planning. *American Journal on Mental Retardation*, 99, 487-499
- 7) 山田哲子 (2010). 成人知的障がい者家族における「子どもを親元から離す」ということ—入所施設利用の決定をめぐる夫婦の体験に焦点を当てて— 東京大学大学院教育学研究科修士論文
- 8) サトウタツヤ 編著 (2009). TEMで始める質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠信書房
- 9) 小沢温 (2009). レスパイトケア. 山縣文治・柏女霊峰編著. 社会福祉用語辞典第7版, ミネルヴァ書房, 378
- 10) 田村恵一 (2006). 障害児 (者) に対するレスパイトサービスに関する研究. 淑徳短期大学研究紀要 45, 57-78
- 11) 高田さやか (2009). 知的障がい者の親のレスパイトケアに関する一考察—ハワイキャンプを通して—. プール学院大学研究紀要, 49, 127-140